幼児文法における主語の構造的位置

團迫　雅彦

1. はじめに

本稿は、主語の構造的位置をめぐる二つの問題、(i) 主語の顕在的な（派生）位置はどこか、(ii) 主語がなぜその位置にあるのかに関して、言語獲得研究の立場から考察を行う。

2. ラベリングアルゴリズム(LA)の予測に反する主語位置と言語獲得

Murasugi (2020)によると、英語や日本語を獲得する幼児は特に T の投射が欠けているため、非主格主語が産出され、{DP, *v*P}構造のラベルも決定されないものの、意味解釈自体は問題なく行われる。一方で、T が獲得されれば、大人と同様に英語の{DP, TP}構造は{φ, φ}として、また日本語では TP としてラベルが決定される。

しかし、Murasugi (2020)の説明では、英語では(1), (2)のような非主格主語と他の要素（時の副詞・否定辞）との相対的位置関係が問題となる。

(1)　非主格主語と時の副詞の相対的位置関係（團迫(2022)）

a.　Her **now** make a home. (Nina, 2;04,06)

b.　Her **already** have a bottle. (Nina, 2;05,26)

(2)　非主格主語と否定辞の相対的位置関係（團迫(2022)）

MOT:　who else is going to eat supper?

CHI:　her **not**.

MOT:　she's not going to eat supper?

CHI:　her **not**. (Nina, 2;05,26)

Murasugi (2020)に基づくと、これら文には一致形態素・主格が現れないため、*v*P の投射になる。もし非主格主語が *v*P 指定部に留まるとすると、(1)では時の副詞、(2)では否定辞に先行しないはずであるが、実際にはそうではない。

また、Murasugi (2020)に従えば、日本語では主格主語が発話に現れた段階で主語は TP 指定部に現れているはずである。ところが、主格主語が観察され始めてから、(3)のように theme 項は主格標示されるが、agent 項は主格標示されないという段階が見られる（團迫(2010)）。TP が投射されるなら agent 項も主格標示されることが予測されるが、実際にはもっと後の段階になって、agent 項は主格標示されるようになる。

(3)　Aki (Miyata (1995)) における主格主語と意味役割

a.　DP+NOM (theme) 2:03,12-

*CHI:　本が ん ない.　(Aki, 2;03,12)

*CHI:　海が あるよ. (Aki, 2;04,04)

b.　DP+NOM (agent) 2;08,24-

*CHI:　アキちゃん, アキちゃんがね, あきがね 買ってたの デパートから. (Aki, 2;08,24)

*CHI:　アキちゃんが 破ったんだなあ? (Aki, 2;09,07)

また、(4)のように、Aki では時の副詞が時制辞と一致して使われるようになるのは 2;8 からであり、これは主格主語で Agent 項の要素が産出された時期と同じである。大人と同様の TP 投射を仮定すると、主格標示された agent 項が現れないこと、時の副詞と時制辞が一致しないことが説明できない。

(4)　Aki (Miyata (1995)) における時の副詞と時制辞

a.　*CHI:　さっき これ ある. (Aki, 2;04,18)

b. *CHI: さっき ある リンゴ. (Aki, 2;06,15)

c. *CHI: たん だい さっき は 乗った, こっち. (2;08,17)

3. 提案

本研究では、英語では不定詞節、obligatory control、*there* 構文の説明に用いられている Kanno (2020)の Partial Labeling を援用し、英語の母語獲得にも関与すると考える。具体的には、φ-feature の一部である[Person]素性がラベリングに関与する段階があるとする。

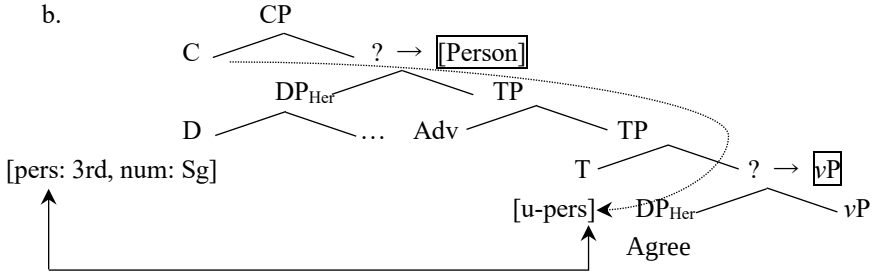
(5) *Partial Labeling* (Kanno (2020: 240, (23)))

Each member of φ-features works as a prominent feature for labeling purposes.

(1a)で示した非主格主語と時の副詞を含む文の派生は、以下のように進むと考える。(i) {DP, *v*P}構造のラベルが決まらないため、DP が移動して{DP, TP}構造を作る。(ii) C から T に[u-pers]を素性継承する。(iii) D 主要部の[pers: 3rd]素性と T の[u-pers]が Agree する。(iv) {DP, TP}構造は、共有素性によるラベル [Person] になる。(v) T は[number]素性が継承されていないため、φ-complete にならない。このため、主語に主格は付与されない。

(6) a. Her **now** make a home. (Nina, 2;04,06) (=(1a))

b.



また、もし幼児が Partial Labeling により(1a)を産出できるのであれば、その段階ですでに Partial Labeling が関与する三つの構文（there 構文、obligatory control、不定詞節）が発話されていることが予測される。(7)のように、これらの構文は(1a)よりも早い段階で観察されるため、この分析が適切であることを示している。

(7) Partial Labeling（[Person]ラベル）に関与する構文と観察される時期

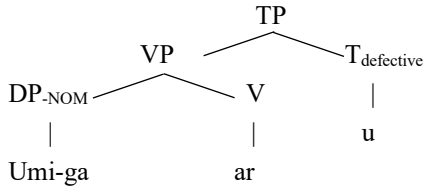
a. *there* 構文： *CHI: there's a stove there. (Nina, 2;01,15)

b. obligatory control： *CHI: you try to draw triangle. (Nina, 2;02,06)

c. 不定詞節： *CHI: want him to stand up? (Nina, 2;03,05)

また、日本語では (i) 初期の theme 項を担う主格主語は V の補部位置にあり、内在格である。(ii) 初期の T は時制の指定が defective であると考える。(8)の構造では、そもそも{XP, YP}構造にならないため、ラベリングの問題は生じない。また、主語は内在格により格の指定を受けているため、TP 指定部に移動する必要はない。

(8)



*本稿は JSPS 科研費 20K00548, 20K00824, 21K00586 の助成を受けている。

参考文献（一部）

Kanno, Satoru (2020) “Shared Labels and Partial Labeling,” *English Linguistics* 36, 227–262.

Murasugi, Keiko (2020) “Parameterization in Labeling: Evidence from Child Language,” *The Linguistic Review* 37, 147–172.